



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
 編集 早川清志
 題字 島崎洋路

『まず、安全に』
 通年コース第四、五回『伐木造材・樹木分類』

前日の夜半までは梅雨の真っ直中、おまけに台風も上陸し、雨雲が日本列島を覆っていました。そして伐木造材の日、朝起きたら台風は通り過ぎ、薄日が差して、梅雨の中休みに入っていました。
 どなたが神様を連れてきてくれましたのでしょうか。おかげで、森の中は少しぬかるといっていいかもしれません。伐木造材をおこなう事ができました。



切り株を使って保科先生の講義



まずはチェーンソーの始動から始めました。一年目の方の中では、カービング用に十台もマイチェーンソーを持つ小野沢さん始め、田中さん、小名川さんがチェーンソーを持参されました。たいはいの方は未経験で、恐る恐るの玉切りでしたが、何度か重ねるうちに肩の力も抜けてきて、何とか見ていられるようになってきました。
 つぎは伐倒。イントラの模範演技の後、二十メートル近いアカマツやサワラを順番に倒してもらいました。後藤班など、やや込んでいるところはあったものの、傾斜もなく倒しやすい条件だったので、倒しやすそうか。まずまず、ちゃんとつるを残して、倒し



倒れるぞー



さっそく反省会が開催された



作業終了時の点検もお忘れなく

4時20分 先生方の講評。本日も終了。お疲れ様でした

3時 小屋に戻りメンテナンスと目立て。仕事が終わった後は掃除を欠かさない。また目立ては切れ味が鈍った時に随時おこないましょう。切れないチェーンソーは危険、疲れる、燃料の無駄使い、機械を傷めるなど、百害あって一利なしです

通年コース第4回
 6月12日(土)
 伐木造材

8時30分 島崎先生の山小屋に集合。先生方のあいさつ、日程説明、班分け

8時50分 模型を使って受け口、つるの説明

9時20分 まずみヶ丘平地林へ移動し、班に分かれてチェーンソーの始動と造材実習

10時40分 伐倒実習に入る



受け口、形良し!!方向良し!!
 12時 小
 屋に戻り
 昼食。途
 中、ミズホ
 鋼機の江
 崎さんがナタやヘルメツトなどを届けてくれた。かくして数人がナタ持ちのお仲間入り

1時 現場に戻り伐倒の続き。後藤班は一番奥の込んだところ。太いアカマツをかかり木にしてしまった。ロープなどを使ってはまず。
 大方一人二本くらいずつ倒せた

『ときには自分で命名も』

樹木分類はいかがでしたでしょうか。きつと今まで以上に樹木が身近に感じられるようになったのではなないでしょうか。検索に保育社の検索入門を使いました。これはなかなか優れたもので、葉から樹木を特定していく方法がとられていますが、さすが、葉だけで特定するというのはどこが無理があるようで、必ず正解にまでたどり着けるわけでもありません。

塾では、多くの仲間とスタッフの助けもあり、正解までたどり着けるのですが、いざ地元に戻り一人で検索するとうまくいかないケースも出てきます。どこか途中で間違えようものなら、永遠にたどり着けません。私もそうでした。これは、一つの手法なのです。

名前を特定するにはその樹木を総合的に観察する事が必要です。例えば、樹木も生き物ですから一年を通して様ざまに変化していきます。信州に多い落葉樹であれば、暖かくなると葉が出、花が咲き、実を付ける。そして寒くなると紅葉し、葉を落としていきます。その時々に変化がありますので、年間を通して見るといっ

も大事です。その移ろいにより、葉っぱより花を見た方がすぐに特定できるというものもあります。木肌の方が特定しやすいものもあります。それから、実、姿、形、生えている場所、低木か高木か、など。いろんな角度から見るとより特定し易くなります。

それでも分からない場合、方法は三つ。一つは、もう相手にしないで放っておく。そのうち分かる時が来るかも。二つ目は、地元で詳しい人を見つけて聞く。各市町村の林務、もしくは県の林務に聞けばそれなりの人を教えてください。三つ目は、自分で名付け親になり、適当に名前を付けてしまおう。塾でも冗談で話が出まし



小屋西の広葉樹林はまるで植物園



信大檜小屋前でお弁当



信大西駒演習林のブナ帯入り口

前回は比べよりス
テップアップした方法
での伐倒を身につけて
いただきます。8時30
分小屋集合。初日が両
先生の担当です
第7・8回 間伐
7月17・18日(土・日)
いよいよ間伐の回で
す。17日には待望の暑
気払いをしましょうか。
バーベキューで一杯。
でも飲みすぎは禁物で
すよ

たが、例えばウリハダカエデ
だったら“スイカカエデ”、
ダンコウバイだったら“恐
竜の足形の木”など。むし
ろ、その方がピタリくるか
もしれないし、案外、正解に
近い鋭い所をついているか
もしれません。まあ、かく言
う私も覚えては忘れの連続
です。(川島 記)

第5回 6月13日(日) 樹木分類

8時30分 島崎先生の山小
屋に集合。日程説明と班
分けにつづき、葉による
樹木の検索方法の説明。
島崎先生が少し遅れてお
見えになり、あいさつ
9時30分 三班に分かれ、
葉による検索、5種類ほ
ど。キハダが少し難し

かったかな。木肌をみれ
ばわかります
10時20分 車に分乗して桂
木場上の登山口に向かう。
そこから島崎先生の樹木
説明を聞きながら信大演
習林へ
12時30分 檜小屋着、カエ
デ類の説明を聞いてお昼
1時30分 標高千五百メー
トル弱のブナ帯の入り口
まで登り、桂小場まで戻
る

3時 小屋まで戻り西側の
広葉樹林にてサクラ類の
分類など
4時 本日終了、解散
参加者/江上さん、小野沢さ
ん、角田さん、梶永さん、
金田さん、小名川さん、
佐々木さん、笹原さん、神
保さん、杉村さん、田中さ
さん

ん 平さ
ん 堀さ
ん 増井
さん、湯
澤さん、
小栗さ
ん、園田
さん、成
田さん、
小笠原さ
ん、斎藤
さん



金曜までの雨で小黒川の水量は多かった

次回以降の予定

第6回 6月26日(土)
下草刈り
植栽木が灌木や雑草に覆
われないように、植えてから
数年間は下草刈りが必要で

す。梅雨の最中のつらい作
業です。8時30分、島崎先生
の山小屋集合。現場は春の
植林地です。大ガマ(造林カ
マ)、下刈り機などお持ちの
方は持参ください。刃物の
手入れも(ナタ、鎌研ぎ)も
おこないます。担当は保科
先生
専門コース 第2回開催
7月2〜4日(金〜日)

リレー通信

「われながら森林塾にいるのが不思議です」

梶永 英生

みなさん、こんにちは。今年から森林塾に参加しています、梶永と申します。

こんなことを言うのもなんですが、大学を卒業して十年経ち、まさかこの森林塾に参加しようとは、われながら不思議な思いでいます。

自分と森林との最初のかかわりは中学校の頃でした。所属していたボーイスカウトでよくスギ林の中でキャンプをしていました。食事を作るときの焚きつけに、枯れたスギの葉を使っています。これがとても煙たかったの



今更ながらに思います。そして、就職、山や森林とは縁もゆかりもない、普通の就職活動をし、とある団体に勤めています。ただ、山登りだけは継続して、今でも

を覚えています。今思うと子供心ではありますが一番落ち着くところでした。

それから大学進学にあたっては、理数系の科目が苦手だったこともあり、文科系の学科に進みましたが、サークルでは山登りをしていました。高校で山岳部に所属していたわけでもありませんでしたが、知っている先輩からの誘いもあり、偶然にも入ったのでした。ボーイスカウト時代のキャンプの思い出がよみがえったのかもかもしれません。北は北海道から南は九州まで日本各地の山に登っていました。そのときは、登山道に植わっている木には目もくれず、林学を専攻していた同級生が、夏休みの課題で木の葉を拾っては標本にし、図鑑と見比べっこしていたのを脳目に、ひたすらピークハントに明け暮れていました。この頃に少しでも木のことを勉強しておけば、

時々行っています。ある日のこと、丹沢の山登りの帰りに昼なのに暗い森林を歩いていました。登山道は多くの人が歩いたことが降って土が流されたこともあり、地面は深くえぐれていました。これを見て、密生して手入れの行き届いていない森林の現状を目の当たりにして、今まで山でさんざん遊んでできていたこともあつて、この鬱蒼としていて暗い森をどうにか再生したいと、と強く思うようになりました。

こんなときに、ひょんなきっかけで森林ボランティアに入って活動するようになり、あるときは、地ごしらえしたところに、苗木を植林しました。またあるときは、苗木だか雑草だか遠目には判然としないところで雑草を刈り、草ぼうぼうだったところがとてもすっきりしました。またまたあるときは、鬱蒼とした森の中に入り、成育の悪い木を切っていくとそれまで暗かった森にさんさんと陽の光が差し込んできました。いずれのときも、作業の後は爽快感や達成感があり、残った木がますます大きくなれよ、という思いでいっぱいになりました。

こうして森林ボランティア活動を少しずつしていきますと、森のことをますます

知りたいという欲望と、できれば、山造りにかかわってみたい、と思いが膨らみ、そんなときに浜田久美子さんの著作に行き当たり、KOA森林塾の存在を知りました。大学時代には見向きもしなかった森林のことを勉強し、山造りの実践の場に参加するまたとない機会を得たと思います。「(私の)失われた十年、山で遊び呆けていた十年」をとりかえすべく、思想・知識・技術の習得に努めていきたい所存です。

森林塾はまだ若干二回ですが、山造りは五十年、百年単位の大作であること、そして、その大作を成し遂げるには技術ばかりでなく、山造りのしつかりとした思想・知識が必要であると身をもつて感じています。何分、知らないことばかりなので今は乾いたスポンジに水が染み込む状態です。

先日、森林ボランティアで木曾の赤沢自然休養林に行き、アスナロの除伐をする機会がありました。アスナロは繁殖力旺盛でこのまま放置すると、ヒノキが駆逐されるのでは、とのことでした。休養林内の樹齢三百年とも言われるヒノキ林を目の当たりにしてスケールの大きさに言葉が失いました。江戸時代にヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ、コウヤマキを、停

止木(ちようじぼく)として伐採を禁止したとこのとき初めて知り、「檜一本首一つ」という言葉に象徴される厳重な管理のおかげで、現在の美林が維持されているのを改めて実感しました。また、宿泊した民宿のコウヤマキの浴槽がとても香りが良く、「できたら木の家を建て、こんな浴槽につかれたらいいな」と思ってしまった。

日本の森林を取り巻く状況については、いい話があまり聞かれませんが、そんな中で、適度な木材の利用をしながら、森林を維持・管理し、後世に美しい森を残していくにはどうしたらいいのか。そしてこのことに対して自分は何ができるのか。これらの問いに対する答えを森林塾の中で少しでもいいから見出していきたくと考えています。これから、よろしくお祈りします。

代返のきかない実験の多い学部であったが、なんののかと休みを作り夜行列車ちくま号の座席の下にもぐりこみ眠りをとる。下山後再びちくまで眠り、キスリングを部屋に投げ込みドタ靴で教室に駆け込む学生時代であった。当時日本は高度成長只中、オイルショックだインフレだといいつつもアメリカに追いつけ追い越せ、今思えば勢いのよい時代であった。進歩、発展、走りぬいた向こうには豊かで幸せな社会があると、目標を共有する時代であった。山で異変はまだ感じられなかった。

京都北山杉は誇らしげに輝いていた。が、光化学スモッグ、喘息、薬害、水俣病、イタイイタイ病、すでに経済成長最優先の矛盾は露呈しはじめていた。皆が同じ方向を向き邁進する生活に窒息しそうになっていたそんな折、つれあいの仕事の関係で



リレー通信

また山で遊ぶためのヘリクツ
金田 明美



家族でエジプトに赴くこととなった。とんずらのいい機会であった。

春霞たなびくナイルの岸辺、牛がゆっくり井戸の周りを巡り灌漑用水をくみ上げる。乳飲み子を抱えた母親の周りを子供達がぎゅぎゅぎゅとぎゅぎゅと。親たちは裾の長い民族衣装ガラバーヤを身にまとい、ときに種をばら撒く。子供達も花咲じいさんのまねをする。家族総出でピクニックにきているのかと見紛うのどかな野良仕事の光景である。それは四千年前とたがわぬ構図であろうと確信、タイムスリップした感覚を覚えた。同じ時代に同じ地球上で効率、収益率とは無縁の世界がある。経済という尺度では決して豊かとは言えなくとも、本当に豊かな光景そのものであると感じた。「進歩」って何だろう、「高度経済成長」って何だろう。私の人生

の大きな転期となった。

高度経済成長くそ食らえ、高学歴社会くそ食らえ、翔んでる女くそ食らえ。諸々の呪縛から解き放たれ、別の時間軸空間軸がインプットされ帰国した。幸い日本のリズムに乗れ

なくとも主婦は生きて行けた。しかし世の中変なものである。そんな座標軸に興味を持つ人に出会い、またシンクタンクに舞い戻る。八十年代末から九十年代はじめ豊かになった企業が生活文化、経済などをテーマに多くのシンクタンクを設立した中の一つである。私に与えられたテーマはまたまた健康、「ニューコンセプトの健康研究」。葉学出身であることにごだわらなくて良いという条件をもらった。健康施設と銘打つところを訪ね主催者健康作りに励む参加者、多くの人に話を聞いた。「若く、強く、美しく」求められる健康像である。食べることに心配のない世の中で、「健康」が人生の最大の目標となる。病死は悪であり、背をむけ懸命に排除しようとする。ナイルの水を飲んだせいかどうかは知らないが、私には「健康」という病に侵されている

としか見えてこない。「健康」という強迫観念に追い詰められているようにすら感じている。

あるとき老師のお話を伺う機会を得た。死をも包み込む大きな世界へ案内された。ようやく私にも納得できる健康が見えはじめた。生病死すべてを包み込む豊かな健康。健康とは人間の生きざま、存在そのものを問うテーマであるのだと。多種多様な生物で成り立つ自然界、思いあがったヒトだけで健康にはなれない。そのシンクタンクはDoタンクを標榜する。つまり机上の空論で物事を終わらせることなく、最終的には具現化するべし、二十一世紀の事業化を考える使命を帯びていた。最も難しい課題である。もちろん一方で二十一世紀の社会がこのまま経済至上主義で続くのか、貨幣社会、価値観はどう変化するかの議論も進められた。人はいつまでも金銭だけが行動決定の動機とはならないことに期待も込めて。幸か不幸か、この時点で私は会社を辞める羽目となった。痴呆が進んだ母の介護のためである。ときを同じくして私を拾い上げたボスが癌で他界した。異変を感じて医者をつたねて半年の結末であった。職を辞した後、彼の遺言としてこのテーマは私の中に大

きな課題として残され、いつも頭の中に座り込んできた。

結婚して関東の海辺に住み子育てをしてきた。子供と通いつめた海はまだまだ豊かであった。すぐ近くの海辺でバケツ一杯のウニを取ったなんて今ではうそに聞こえる。裏の川で小学生の息子はウナギを捕まえ、アユを釣って帰ってくる。両親から教えられた地球は最高の遊び場であることを私も次世代に伝達してきたつもりである。飼ひ犬の口は山へ散歩に連れていき鎖をとくと道なき急斜面を一目散に駆け上り、突然草むらから姿をあらわし私がちゃんと着いて来ているか確かめに戻ってくる。得意げな顔であり、その躍動する筋肉美は今も目に焼き付いている。その口も年老い、脳血管で一週間立てなかつたが自ら病を克服した。やがて目が見えなくなり耳が聞こえなくなり鼻も利かず餌のありがたがわからない、人が近づくと気が分らないほどに老い、二十歳の誕生日を目前に娘の腕の中で静かに息を引き取った。立派な生涯であった。私達家族に多くを教えてくれた。海も山も豊かな生物系の中の一員となれてはじめてヒトも健康に暮らせるのではなからうか。

今、また孫と同じ海を歩き、生き物の少なさに寂しさを感じる。コロが駆け巡った里山を孫と共に歩き宅地開発で傷だらけの惨状に唾然とする。気がついてみれば路地がなくなり木々がなくなっていた。経済発展をすべ

て悪とは思わない。横浜から伊那路へ通えるのも進歩発展のおかげである。ただ、孫世代にも何物にも代えがたい遊び場、豊かな地球をもう少し修復してから引き渡したいと考える。

先祖代々の墓は島根にあり、両親もそこに眠る。親達も住んだ経験はなく馴染みの薄い遠方の地の墓参りは、えてしておろそかになりがちであった。母の一周忌、父の二十五周忌の法要を終え、兄は墓を山荘のある八ヶ岳山麓に移すことを提案、われわれ姉妹も賛同した。墓参りを重ねるうち、わが家も近くに山小屋を作ることとした。小さな土地とはいえカラマツを切り倒し、ブルが整地した傷跡は痛々しく心の傷となった。孫達と共にこの傷跡の修復から豊かな地球を再生させる作業の緒としたいとの思いが森林塾へいざなった。自然の営みの循環の輪に人間の営みをはめ込む里の産業の構築により山を癒し、山に癒される。これがボスにささげるニューコン

セプトの健康というテーマの事業化への入口かも知れぬと森林塾に参加し心ひそかにときめきを覚えている。

おわりに

樹木分類では標高千五百メートルくらいで折り返しましたが、西駒ヶ岳(木曾駒が岳ともいう)山頂までは、桂小場登山口から将景頭山經由で六時間程度です。梅雨が明けたらトライしてみるのが良いかもしれません。丁度コマクサ始め高山植物が咲き誇る時期です。標高は二千九百五十六メートル。お急ぎなら駒ヶ根からロープウェイという手もあり。

三千メートル以上を攻めてみたい方には長谷村の仙丈ヶ岳がお勧め。戸台から北沢峠まで一時間の村営バスを使えば、そこから山頂まで約四時間ほど。日帰りも可能です。伊那からなら中央アルプスも南アルプスもすぐそこです。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994



E-mail:
ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp